



若手皮膚科医のみなさん、 oncologistを目指しませんか

山崎 直也

国立がん研究センター中央病院皮膚腫瘍科科長

日本では横浜で2023年10月19日から3日間、日本癌治療学会学術集會が開かれた。私は19・20日と出席し、10月21日からはマドリッドで開かれていた欧州臨床腫瘍学会(ESMO)へと梯子して参加した。6月にはシカゴで開催された米国臨床腫瘍学会(ASCO)にも参加したが、海外との往来に手続きや制限がなくなったため、いずれも4年ぶりの参加であった。

日本癌治療学会の約1万7千人の学会員のうち、皮膚科医はわずか50名である。入退会といった出入りはあるが、この15年で5名ほど増えたのみである。かつて皮膚がん関連セッションの参加者は聴講者数より演者とその関係者のほうが多いという時代もあり、2014年、メラノーマ治療のbreak throughがおりシンポジウムに立ち見が出た折に、座長をしていた私は感激のあまり座長席からその盛況ぶりを写真に撮らせてもらったという思い出もある。ESMOはASCOに次ぐ全世界で2番目に大きな腫瘍関連の学会であり毎年3万5千人前後が参加するが、おそらく日本人皮膚科医の会員数は10名足らずであろう。今回私には進行期メラノーマの国際共同治験であるCOLUMBUS試験の分担研究者として7年アップデートデータ公開関連の仕事と、いくつかの今後の治療開発計画のミーティングがあり、会場では学会参加の腫瘍外科、腫瘍内科の日本人の先生方とはお会いしたが皮膚科医にはとうとう1人も会えなかった。国立がん研究センター中央病院皮膚腫瘍科ではレジデント募集時に「ASCOやESMOなど国際学会に

スタッフとともに無料で参加できる」という特典付きで募集をかけてきた。皮膚がん治療を専門分野とすることを志す若い世代には、ぜひ現地の熱気を経験してほしいと思っている。

熱気といえば当施設の位置する築地の場外市場にはこのところ外国人観光客が戻ってきて、連日ものすごい賑わいである。本来車道であるところにも人が溢れ「ここ、そんなに美味しいか？」と思うような店にも長蛇の列ができています。私はマドリッドを訪れたのはおそらく4回目、サン・ミゲル市場でお約束のパエリアやイベリコ豚の串焼きの列に並びながら「これはスペイン人からみたら、私が築地で思っているのと同じことをしているのかな」などと考えていた。スペイン語はほとんどわからないけれども、またスリも横行しているのだろうけれども、市場のランチが学会場の変なサンドイッチよりずっと新鮮で美味しいのは間違いなかった。学会の熱気でも市場の熱気でも、きっかけはどちらでもよいので、若い世代にはぜひ国際学会に参加して世界最先端の研究に触れ、本物の臨床研究を直接目でみて肌で感じてほしい。

皮膚がんは白人のがんであるが、若い世代には逆に日本人、アジア人の強みを活かした研究をぜひ進めてほしい。粘膜メラノーマ、血管肉腫、乳房外Paget病など、治療開発が遅れている分野で日本人がオピニオンリーダーになれる可能性は十分にあるのだから。